

# 浄土の旋律

アコーディオンの二重奏による音楽会の切符をいただき、十月末の夜、東京郊外の武蔵野市民会館に出かけた。

スコットランド出身のジェームス・クラップとノルウェー人のガイル・ドラウグスヴォルという、ともに一九六七年生まれの二人は、黒いスーツにスキンヘッドで登場した。

アコーディオンは深みのない楽器と思っていたが、そんな先入観はすぐに消えた。第一部はストラヴィンスキーのバレエ音楽「ペトルーシユカ」で、休憩をはさんでの後半はムソルグスキの組曲「展覧会の絵」。いずれも演奏者自身が編曲していて、どちらも陰うつな気分にあふれていた。

南	無
善	財

菅原伸郎

重苦しい旋律が切れ目なく続き、演奏者の意図が伝わってくる。もともとは華やかさもある絵画的な原曲なのだ、それを現代の不条理とか孤独とか、あるいは薄墨色の世界に移し変えている……。

途中から、右隣に坐った中年男女のひそひそ話が気になってきた。一曲ごとにプログラムをのぞき込んだのは「これは『プロムナード』ね」「いや、こっちだよ」などとささやくのだ。演

奏された二つの大曲は、小さな楽章ごとに「キエフの大門」といった題名がついている。その標題に沿った場面を思い浮かべながら聴いているらしい。

耳障りだったこともあって、二人の鑑賞の仕方が気になってきた。たしかに、ヴィヴァルディーの「四季」を聴くとき、春の楽章では若葉を想像し、夏では青葉を思い、秋は紅葉で、冬は枯れ枝と耳を傾ける人はいる。それはそれで構わないとして、題名のないベートーヴェンの弦楽四重奏曲、あるいはモダン・ジャズなどでは何を思い浮かべるのだろうか。

この日の演奏はそうした形ある風景からほど遠く、乾いた、現代的なスタイルだった。不安や絶望が激しく、厳しく、悲しく、直接的に迫ってくる。バレエ音楽ではあっても、物語や舞台

装置をわざわざ思い描く必要もないように、私には思えたのだが……。

演奏会が終わって、夜道を歩きながら、唐突に、まったく別のことが頭に浮かんだ。あつ、そうか、「浄土」という言葉もそういうことか、という小さな発見だった。というのも、数日前から「阿弥陀經」にある次の一節が気になっていたのである。

《極楽国土には、七宝の池あり。八功德の水、その中に充滿せり。池の底、純<sup>もっは</sup>らもつて金沙を地に布<sup>し</sup>けり……》（岩波文庫『浄土三部經』下巻所収）

まさに成り金趣味の豪邸だ。古代インド人は想像たくましく、金ぴかの極楽を描いたつもりだろう。だが、こうした描写こそがえって浄土の深い意味を誤解させるのではないか。

たとえば、ベートーヴェンの第五交

響曲の「ダ、ダ、ダ、ダ、ダーン」という冒頭は、運命が戸を叩く音とも呼ばれてきた。しかし、それから続く名曲の全体を「いま、悪魔と神が戦っているぞ」などと思いつながりながら聴くだろうか。隣席で標題にこだわっていた二人連れには、そんなご苦労が感じられた。余計なお節介だろうが、演奏の激しさや悲しさをただ黙って感じていれ

ばいいのに、と言いたくなった。

「浄土」を死後の世界と考えて、あれこれ情景を思い描くことも似たような徒勞だろう。信じたくなる気持ちも分かるにしても、結局は何の保証もない空想である。子どもっぽい他界観であり、諸行無常や色即是空の仏教とは違ってくる。そうではなくて、浄土は本来、音楽のように色も形もない「状態」に違いない。何か大切な体験をしたときの一種の「感動」を表しているのでは、と考えついたのである。

この晩のアカーディオ演奏は、ロシア音楽らしい、重苦しい旋律が中心だった。しかし、気分転換のために、か、アストル・ピアソラのタンゴもいくつか組まれていた。こちらは透명한音色で、さわやかな世界だった。

（すがわら・のおお／ジャーナリスト）

